

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(3)

庄籠しょうろうり

道子

「いじちゃんのおばあちゃんって……」の巻

きょうは、竹やぶに散歩に行く。このたけのこ村は名前の通りたけのこの産地。たけのこ村のたけのこは、他で取れたたけのこより、やわらかくて、えぐくなくておいしいと評判だ。

竹やぶは、ほつたらかしてるとすぐ荒れて、中を歩くのも大変になる。が、たけのこ村の竹やぶは手入れがばっちり行き届いている。だから安心して遊びに行ける。だけど、大切な竹やぶだ。勝手にどこにでもというわけにはいかない。竹田園長先生が昨年卒園したこうちゃんのおばあちゃんにお願いしてみた。どうぞと言っ

て下さった。

竹やぶは蚊がいる。滑りやすい。五月だけど、長そで・長ズボンに長ぐつ。背中にはお弁当を入れたりユックサック。そして水筒に帽子。背の順に二列に並んで出発だ。

「もう！」

さつきから、あいこが騒いでいる。

「どないしたん？」籠先生が聞きにいった。

「だって、ももきくん、あいこのことどんどん押すか

ら、あいこ、田んぼに入ってもた」

あいことももきは手をつないでいる。あいこが右側。道の右側を歩いている。ももきは何も考えていない。田んぼのふちがコンクリートの一本道になっている。あそこ歩いたらおもしろそうと考えるより早く、ももきは気がつけば一本道を歩いている。手をつないだままである。当然、右側のあいこは、田んぼの中を歩くはめになる。

信号を渡ると、道の右側に溝がある。魚の好きなももきは、溝をのぞこうと考えるより早く、溝をのぞいていく。手をつないだままである。当然、右側のあいこは、溝にはまりそうになる。

ももきに悪気はない。しかられて、しょんぼりしている。

「あ、ラジオのおっちゃんや」

扉の工事をしている家の庭におっちゃんが入っている。

「おはよう」

おっちゃんがブロックを積んでる人に右手をあげてあいさつしている。

「あそこ、おっちゃんの家？」

籠先生がとしなりに聞いた。

「ちやうで。おっちゃんの家は、さつきの道の角を曲がったところ」

「ふーん」

竹やぶの中は、ひんやりしていた。どこからともなく涼しい風が吹いてくる。頭の上では笹がさらさら言っている。竹田園長先生と籠先生がうつとりと見上げている間に、子どもたちは、もう遊び始めている。

落ちかけている竹の皮をはく。今年出たたけのこなのにもうこんなに見上げるくらい大きくなっている。急な坂をかけあがる。下にたまった笹ですべりやすい。小さなたけのこを掘る。細いたけのこをひっぱり。何回も



あつちこつち折り曲げると、ぽきんと折れる。やったあ。崖を飛び降りてみる。高い崖はちよつと怖い。

「この竹、穴、あいとうで」あいこが見つけた。

「あ、ほんまや」となみか。

「かぐや姫の穴かも」

と、籠先生。

「えっ？ほんま？」とあいこ。

「せやけど、かぐや姫の竹は、金色に光つとるんとちゃうん？」たつやがつっこみを入れる。

「そう、かぐや姫が出てきた時は光つとつたんやで。でも、もう昔の話やから、普通の竹の色に戻ってしもうたんやわ。きつと。」

「そうかなあ……」どうもうそくさいけどなあ。

竹田園長先生が、かばんからロープを出してきた。斜めになった竹にくくりつけた。ぶらんこができた。乗りにくいし、おしりが痛い。だけど、乗りたい。順番が待ちきれない。もみも先生にだっこしてもらって乗った。

籠先生が別の斜めになった竹にロープを結んだ。

「あつ、あ、あー！」

ターザンだ。あつなみかが落ちた。でも、下が笹の葉でふかふかしてるからけがはしない。

今度は、崖の太い竹の根元にロープをくくりつけた。

えっ？ このロープを持って、下から崖を登るの？ や

るやる。おもしろそう。

りようたが一番に挑戦した。しつかりロープを持つ

て、足で崖をよじ登る。ほら、もうちよつと。籠先生が

掛け声をかけた。

「ファイトー！」

「いっばあーつ！」

崖を登りきつたりようたがポーズを決めた。

竹やぶで、こうちゃんのおばあちゃんが敷いてくれたシートの上でお弁当を食べた。また少し遊んだ。

「先生、おしっこ」

じゅんが言った。

「しゃあないな。向こうの方で、こつそり、させてもら

い」

「はい」

じゅんとたつやとももきとたかよと……何人もが向この竹やぶに走っていった。

ももきを残して、みんな帰ってきた。

ももきは、なかなか帰ってこない。「ももきくん、遅いね。まさか誘拐されたんじゃないか……」

籠先生が走っていった。事件だ。三人組もついて走った。隣の竹やぶの中にももきの白いおしりが見えた。

「紙……」ももきははんべそだった。籠先生が笑いながらティッシュペーパーを取りに行った。

帰りは重かった。掘ったたけのこやら、竹やら担いで帰った。暑かった。遠かった。

「先生、もう歩かれへん」

「あつそ。そんなら、置いていくわ。バイバイ」

そんな殺生な。

やつと幼稚園に着いた。顔洗って、半そで半ズボンに着替えた。冷たいお茶を飲んだ。ほっとした。

「先生、外に遊びに行ってもええ？」

「えっ？ あんた、さつき、もう歩かれへんって言うたやん」

あれ、そんなこと言うたかな。

「もう帰る時間やわ。帰る用意しよ」

みんなが帰る用意をして椅子に座った。竹田園長先生が前に座って、みんなの顔をぐるっと見た。

「きょうは、一年生のこうちゃんのおばあちゃんの竹やぶに遊びに行かせてもらいました。みんな、こうちゃんのおばあちゃん、知ってる？」

「知っとおで」

「知っとお、知っとお」

みんな口々に言う。

「じゃあ、今度、こうちゃんのおばあちゃんに会った

ら、『ありがとう』ってお礼、言おうか」

「うん、言う」

「わかった」

みんな口々に言った。

その時、たかよが言った。

「えっ？ こうちゃんのおばあちゃんってたけのこだったの？」

一瞬部屋が静かになった。隣に座っていたじゅんが言った。

「えっ？ こうちゃんのおばあちゃんが竹からうまれたゆうこと？」

隣の席のあいこがハツとして言った。

「あ、きょう見たあの竹の穴、あそこからうまれたんっちゃう？」

その隣のたつやが言った。

「何言うトン？ こうちゃんのおばあちゃんがたけのこやつたら、こうちゃんは、たけのこの子の子になってしまうやんか」

「たけのこのこのこ？」

その隣のかずがつぶやいた。その隣の隣のももきが

♪ たけのこのこのこあそこにここに♪

と歌い始めた。

♪ つーちのなかからあたまをだして♪

あいことなみかがさつと床にしゃがんだ。まきも床にしゃがむと手をたけのこにして竹田園長先生に言った。

「園長先生、ピアノ弾いて！」

「はい」

竹田園長先生がピアノの前に座ったときには、全員たけのこになっていた。たかよもなっていた。

♪ ずんずん たけのこ どこまで のびる

たけのこ すくすく おおきく なって

おやの たけにも まけない ように

それぞれ たけのこ てんまで とどけ♪

みんな、天井に届きそうなくらい背伸びをした。
たけのこ 作詞 植田啓次郎

(保育研究グループ はるにれ)

☆植田啓次郎をご存知の方は、ご連絡ください(編集部)。